



IP SJ Magazine

[巻頭コラム]

情報処理技術が切り拓く未来

■ 後藤 真孝

情報処理技術が切り拓きつつある未来の1つの象徴として、「《特集》CGMの現在と未来：初音ミク，ニコニコ動画，ピアプロの切り拓いた世界」が掲載された本誌2012年5月号の表紙に、「初音ミク」が登場した。2010年の創立50周年記念全国大会で私が企画・司会をした同名の特別セッションに連動しており，上記特集でもゲストエディタとして企画・編集を担当した。

初音ミクは，単なるキャラクターではなく，音楽情報処理技術に基づく歌声合成ソフトウェアであり，かつ，人々が活発な創作活動を繰り広げるCGM（消費者生成メディア）現象の象徴でもある。上記特集で述べたように，「人間の歌声でなければ聴く価値がない」という旧来の価値観は打破され，「創造する環境」が創造されたことで，日本の技術・社会・文化の強みの相乗効果を引き出すさまざまな連鎖反応が起きた。

科学技術が切り拓く未来を描く効果的な手段に，SF（サイエンスフィクション）がある。なんと，そのSF分野で歴史ある第44回星雲賞【ノンフィクション部門】を，上記特集の別刷が受賞した。まさか学会誌の記事が星雲賞に縁があるとは夢にも思わず，嬉しい衝撃を受けた。本家のSFコミュニティから，「情報処理学会が，ワクワクするようなSF的現実を語っている」，「SF的未来をノンフィクションにする研究活動をしている」と受け止められたとすれば喜ばしいことである。

上記特集では「初音ミクには，人と人をつなげるハブの効果もある。異分野にいる人々

■ 後藤 真孝
産業技術総合研究所 情報技術研究部門
首席研究員

1970 年生まれ。博士（工学）早稲田大学。音楽情報処理の研究に 21 年間従事し、歌声合成技術「ばかりす」等、近年は歌声に関する研究を「歌声情報処理」と名付けて推進中。ドコモ・モバイル・サイエンス賞 基礎科学部門優秀賞、科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞、情報処理学会 長尾真記念特別賞等、34 件受賞。



が、初音ミクや歌声合成をキーワードに次々とつながってきた」と述べたが、本受賞をきっかけに SF コミュニティと本会の接点が増え、より多くの人々が情報処理研究に興味を持ち、コラボレーションが生じることを期待したい。実は、昨年に星雲賞【日本短編部門（小説）】を受賞した SF 小説では、私が知らないうちに「産総研の後藤」が主人公として活躍していて、驚愕し胸が熱くなった。研究の面白さを異分野に伝える手段として、研究者を主人公にした小説や映画は有効であり、その意味でも嬉しかった。

今後も情報処理技術が未来を切り拓き続けるためには、次世代の人々も興味を持って活躍することが重要となる。そのためには、深い技術や理論の面白さ、社会の役に立つ醍醐味に加え、次世代がワクワクする SF 的な夢も、我々研究者はもっと語っていく必要がある。そういう研究者が夢を語っている姿、研究や技術について楽しそうに議論している姿は、動画中継して広く見てもらえるようにしたい。音楽情報科学研究会では、2012 年度から毎回、登壇発表を動画中継しているが、たくさんの方々が遠隔視聴してくれるのは素晴らしいし、物理的に会場に集まる価値を高める挑戦にもつながる。

研究の発展において個人の独創性は不可欠だが、より大きな貢献をするには、人と人がつながり協調することが大切である。力を合わせて、次世代がワクワクする夢を語り、SF を超える未来を切り拓いていきたい。

